

「高い学力」とは何か
ーフィンランドで考えるー

開倫塾
塾長 林 明夫

Q：フィンランドに行かれたそうですね。目的は何ですか。

A：(林明夫。以下省略) はい。昨年12月に、OECD(経済開発機構)のPIISA(学力到達度調査)で、フィンランドが世界一高い学力をもつ国であるという結果が出ました。その背景となる理由をディスカッションする国際会議が、首都にあるヘルシンキ大学で開かれ、それに出席のためです。

Q：フィンランドはどんな国ですか。

A：美しい国です。人口は、茨城県と群馬県と栃木県を合わせたより約100万人少ない25万人で、こぢんまりとした国です。今日は3月17日ですが、ヘルシンキでは小雪が美しく舞い、港は寒さのために凍っています。緑色の2両連結の路面電車が人々の重要な交通手段となっています。そこに住む人々の顔は、「ムーミン」に登場する人物にどことなく似ているような気がします。

Q：なぜ、フィンランドは世界一学力の高い国になったのですか。

A：このOECDのPIISA調査は2000年から始まり、3年ごとに、41か国、約25万人の15歳の人を対象に実施されるものです。「読解力」「数学」「科学」と「問題解決力」の4分野の能力が測られます。

フィンランドは、2003年度に行われた調査で、「読解力」「数学」「科学」で一位、「問題解決力」では韓国に次いで二位でした。総合で一位といえます。

では、なぜフィンランドは世界一学力の高い国になったのでしょうか。それは、知識社会に対応できる国民を育てるために、文部省と大学と学校(学校の先生方)が意思(考え方)を一つにして、力を合わせた結果であると私は考えます。

税金の配分を考える「文部省」と、先生の教育を担当する「大学」と、現場で直接教える「先生」の3者が力を合わせ、何のために、何を、どのように考えるかという基本をよく話し合い、そこで一度決めたことを、子どもたちのために責任を持って実行に移した結果であると私は考えます。

フィンランドでは、すべての人々に学習の機会が与えられているようです。つまり、すべての国民が自由に、学びたい内容を、学びたい時期に、学びたい方法で学ぶことができるのです。ただし、学ぶ前提として自分で学ぶ能力を身に付けていること(自己学習能力)と読む力があること(読解力)の2つが挙げられます。

小学校と中学校が繋がった9年間一貫教育を行う学校を訪問した時、学校の中を案内してくれた9年生に、「読書は好きですか。」と質問すると、「もちろん大好き。」という答えが返ってきました。また、無学年制で科目を自由に選択できる高校を訪問した時、その高校の教育のしくみを解説してくれた3年生に、「この高校の教育の方法に満足していますか。」と質問したところ、「もちろん大満足。勉強の仕方がよく身に付くからね。」と答えてくれました。

「読書」を通して、読んで考え、表現する力を身に付ける、また、勉強の方法を身に付けることで、自分で学びたい科目を組み合わせることで高校生活を充実させ、学力を向上させる、これがフィンランドの「高い学力」の背景の一つのようです。

Q：最後に一言どうぞ。

A：すべての人間は「善く生きよう」としています。子どもたちがどのような境涯(きょうがい)にあっても、一人ひとりが学びたい事がらを、学びたい時に、学びたい仕方ですることができる環境を整えることにより、「子どもたちを善くしようとする働き」としての「教育」を実現しようと国を挙げて力を合わせ努力しているフィンランド、この国に学ぶところが多いと私は思います。

*参考文献

慶応義塾大学名誉教授

村井実先生著「教育と民主主義」2005年1月1日東洋館出版社刊。

*会議の資料は

www.oph.fi/info/finlandin_pisastudies/conference_2005 で公開の予定です。

－ 3月17日、ヘルシンキ大学図書館にて記す－